

「マインズ・アイ」という本に収録されている、テレル・ミーダナー作「動物マーク III の魂」という短編を、少し長くなりますが、はしょって紹介しましょう。結構有名なもので、どこかの国語の試験にも使われていましたね。

この短編に登場する女性は機械が生命を持つこと、生命が機械として理解できることを絶対に認めようとはしない。ある日、機械と生命について、彼女は男友達のハントと激論になり、こう言い放った。

「私は機械を壊すこともできるし、そのことで悩みもしないわ。でも動物は殺せないの」

するとハントは彼女を実験室に連れて行った。そこにはアルミ製のカブトムシのような単純なロボット、「マーク III」がいた。マーク III は、スイッチを入れると静かなうなり声とともに電気の差込口を探し、それを見つけると猫がごろごろとのどを鳴らすような音を立てて電気を吸うことができる、ただそれだけの機械だった。

「かわいいわ。でもこれがどうしたって言うの？」

「こいつを君に殺してもらいたいんだけど」

「どうして私が殺さ・・・壊さなきゃならないの。この・・・この機械を」

「単なる実験としてだよ」

そうやってハントは彼女にハンマーを渡した。マーク III は電気を吸いながらごろごろという音を立てている。彼女はこの奇妙な機械を横目で見て、おずおずとハンマーを振り上げた。

「でも・・・食べてるわ」

ハントはただ笑っているだけだ。彼女はむっとしてハンマーを振り上げ、強く振り下ろした。マーク III はそれを感じて素早く後ずさりした。赤いランプを点滅させながら、実験室内を逃げ回り、なかなか捕まらない。とうとう彼女はくたびれ果ててしまった。

ハントは彼女にもっと簡単な方法を教える。マーク III は自分と同種の鋼鉄製のものには敵意を感じ反応するので、ハンマーを置いてマーク III を素手でつかみ、裏返しにして台の上に置き、動けなくしてから叩きつぶせばいい、と。マーク III は差込口を見つけ、再び電気を吸っていた。

彼女はハントの助言に従うことに決めた。素手でマーク III をつかんだとき、彼女は適度に暖かい金属の肌を通じて、心地よいモーターの振動を感じる。彼女は台の上で無抵抗なマーク III にハンマーを振り上げた。マーク III のランプの色が警戒を示す色に変わった。マーク III は車輪を動かし逃げようとするが、動くことはできない。彼女はハンマーを素早く振り下ろした。しかし、ねらいがそれで片側の車輪だけが壊れた。そのはずみで起き直ったマーク III はぐるぐる回転運動を続けている。マーク III は赤ん坊がすすり泣くような音を出し、体の下には流れ出た真っ赤な潤滑液がたまっているのが見えた。

「スイッチを切って」

彼女はきっぱりと言った。しかしスイッチは彼女の一撃で壊れていて、もはや電源を切ることもできない。

「とどめの一撃は君がやるかい？」

彼女は後ずさりし、ハントがハンマーを振り上げると首を振った。

「ねえ、直せないの？」

ガチャンと金属的な音がして、鳴き声はやんだ。